

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25330420

研究課題名(和文) タブレット端末を活用した国際交流型メディア・リテラシー教育の実践的研究

研究課題名(英文) Practical research on the Media Literacy Education focused on international exchange utilizing tablet computers

研究代表者

坂本 旬 (SAKAMOTO, Jun)

法政大学・キャリアデザイン学部・教授

研究者番号：60287836

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：タブレット端末を活用したグローバル・メディア・リテラシー(GML)教育を実践検証するために、国際交流型メディア・リテラシー教育のルーブリックを試作するとともに、国内外の小中高校および大学でタブレット端末を用いたビデオレターやデジタルストーリーテリング制作を行い、国際交流や異文化理解教育を実施した。

。タブレット端末を用いることで、小学校中学年から映像の撮影だけでなく、編集まで行うことができること、ビデオレターを用いた海外の学校との交流により、異文化理解が大きく進むこと、ユネスコのESD(持続可能な開発のための教育)の目標となる諸能力の向上にも資することが確認された。

研究成果の概要(英文)：To verify global media literacy education that utilized tablet computers, this study conducted a pilot study to create rubrics. The focus of this study was on international exchange programs related to the global media literacy education. At the same time, this study helped to promote international exchange programs as well as an understanding of inter-cultural education through exchange and production of video letters and digital storytelling using tablet computers at elementary, secondary, and university levels both in Japan and other countries.

The results of this study showed that elementary and junior high school children producing and editing video letters could accomplish this using only a tablet computer. In addition, this study also proved that using video letters for exchange programs between Japan and other countries promoted inter-cultural understanding as well as improved students' various competencies of UNESCO's objectives for Education for Sustainable Development.

研究分野：メディアリテラシー

 キーワード：メディアリテラシー 情報リテラシー eポートフォリオ 国際交流 異文化理解 ユネスコ メディア
 情報リテラシー タブレット端末

1. 研究開始当初の背景

本研究は平成 22 年度採択科研費研究「国際文化探究学習のためのコミュニケーション・マネジメント・システムの研究」の成果を基礎とし、それをより発展させるものである。前研究では、グローバル・メディア・リテラシー (GML) 教育理論として「5C(Critical thinking、Communication、Creation、Collaboration、Citizenship の 5 つのコア)3C(Correspondence、Communication、Collaboration の 3 つのフェーズ)理論」を構築し、その実践成果を 2011 年 NAMLE(全米メディア・リテラシー教育学会、米国)及び 2012 年国連・ユネスコによる MILID(メディア情報リテラシー異文化間の対話、スペイン)会議で報告した。我々は、これらの会議で、GML 教育に異文化理解教育の視点が不可欠という認識が国際社会の潮流であると確信した。

異文化理解を基軸にした「5C3C 理論」の実証研究では、通信(Correspondence)、交流(Communication)、協働(Collaboration)と段階的に、日本と海外の学校間交流のフェーズを設定することで、GML 教育の双方の方向のカリキュラム開発と実践が容易になり、映像作品による交流が異文化理解に有効であると確認された。

しかし、GML 教育によって、児童生徒がどのような能力を習得し、どのような変容がみられたのか、といった教育評価については、前科研費研究では十分な検証をすることができなかった。そのため、交流前後における子どもたちへの支援や調査だけではなく、学習過程の成長を子ども自身や教員が可視化できる学習支援システムの構築が望まれる。また、技術的問題として、途上国との交流の場合、児童生徒が映像コンテンツを作るための情報環境が十分整備されておらず、動画編集操作が難しいなどの問題がある。そのため、異文化理解能力の育成を目指しているにもかかわらず、実際にはソフトウェアの使い方を教えることに時間を費やし、3C のフェーズに十分な時間を割り当てることができないという課題を残している。そこで、今回は、一台で撮影・編集・公開までできるタブレット端末の可能性に着目した。

日本におけるメディア・リテラシー教育研究は、カナダやイギリスを中心とした先進国の事例研究、メディアのテキスト分析を中心とした授業実践、または ICT を活用した単発的の学校間交流などが主流である。よって、国連やユネスコ、さらに発展途上国を含んだグローバルな観点からの異文化理解や双方向的な国際交流の教育評価、及び CSCL 型学習支援の有効性の検証は十分とは言えない。本研究は、これらの研究課題の延長線上に位置づくもので、上記の研究目的を推進することによって、課題点を明らかにする。

本研究は GML 教育に関する国連及びユ

ネスコの動向とも大きく関係している。上記科研費研究の成果報告として平成 24 年 3 月には、国連「文明の同盟」メディア・リテラシー教育プログラムマネージャーの ジョルディ・トレント氏を招き、国際シンポジウム「文化葛藤時代のメディア・リテラシー教育」を開催した。そこで、世界的なメディア・リテラシー教育の動向と我々の研究の方向性が一致していることを確認した。また、国連「文明の同盟」が 2009 年に公開した『世界のメディア教育政策-ビジョン、プログラム、挑戦』(“ Mapping Media Education Policies in the World ”)を翻訳し、上記科研費研究成果の一つとして国連「文明の同盟」サイト上に無償公開している (http://mil.unaoc.org/wp-content/uploads/2012/10/Mapping_final.pdf)。

2. 研究の目的

本研究は、(1)コンピュータ支援協働学習 (CSCL)型 GML 教育の評価手法の開発、(2)SNS を用いた協働型学習支援のシステム構築 (Mahara)とその有効性の検証、及び (3)GML 教育におけるユーザービリティに優れたタブレット端末の有効性の検証を行うことを目的とする。研究期間は 3 年間とし、「5C3C 理論」に基づく GML 教育を、小学校レベルでは日本-カンボジア間で、中学校レベルでは日本-中国間で行う。

1 年目は、GML 教育を評価する評価手法を国内外から情報収集すると同時に、授業設計及び現地での授業支援を行う。実践評価では、実践前後のアンケート調査だけではなく、児童生徒が作った映像作品や、SNS のログ、授業中の発話等を記録し、定性的に評価できる手法を開発する。また、タブレット端末と学校間交流用にクローズドな SNS を援用した協働型学習支援システムを導入し、情報発信段階 (Correspondence)としてのデジタル・ストーリーテリングの授業実践を行う。

2 年目はさらに Skype や SNS などの ICT を活用して協働作品を制作する国際協働段階の実践 (Communication、Collaboration)を行う。これらの実践から得たデータを分析し、評価基準(ループリック)の開発、及び評価要素や評価手法の妥当性の検証を試験的にすすめる。併せて、SNS を用いた協働型学習支援及びタブレット端末の活用方法の有効性を検証する。3 年目は、1、2 年目の実践の分析及び検証をすすめる、研究成果を国際会議等で発表する。

3. 研究の方法

本研究では、異文化理解をめざすグローバル・メディア・リテラシー (GML)教育を推進するために、3 つの項目を設定した。これらは、コンピュータ支援協働学習 (CSCL)型の (1)教育評価手法の開発、(2)学習支援システ

ムの開発、および(3)タブレット端末の活用である。

(1)教育評価手法の開発

グローバル・メディア・リテラシー(GML)教育理論に基づく評価手法に関する情報収集および整理については、GMLの活動が盛んなアメリカ・カナダの事例を中心に行った。それらの事例の中から、特に米国大学協会パリュウ・ループリックによる「創造的思考法」を参照しながら、GML教育における「5C3C理論」に基づいた異文化理解およびグループによる協働学習に焦点を当てた評価項目(例えば、批判的思考力、チームワーク、コミュニケーション能力、情報及びメディアの共有・発信力(紙・電子)、MIL及び民主的なシチズンシップの習得)を厳選した。同時に、デジタル・ストーリーテリングやビデオレターの実践者(研究者)から実践の概要の聞き取り調査をし、国際交流型メディア・リテラシー教育のループリックの試作を行った。

ループリックの試作と平行して、授業設計や授業支援も継続的に行った。例えば、iPadを使って撮影・編集・公開までできるタブレット端末の可能性を探るため、現地の教員・生徒向けのワークショップの開催(大連)や研究者・法政大学の学生による現地支援(カンボジア・研修旅行)などである。これまでの途上国との交流学习の技術的問題として、映像コンテンツを作るための人的・設備的環境が十分に整備されてはならず、児童生徒が動画編集をすることが難しい等の問題があったからである。

(2)学習支援システムの開発

eポートフォリオシステム「Mahara」を国際交流用SNSとして、システム構築と活用および有効性の検証を行うために、カンボジア・メコン大学を対象とし、同大学へのサーバーの設置と運用を行った。メコン大学へのMaharaの導入は、発展途上国で初の事例だと思われる。

(3)タブレット端末の活用

本研究期間中にタブレット端末を活用したGML教育実践を行った国内の学校は次の通りである。

墨田区立梅若小学校
江戸川区立鹿骨東小学校
福島県只見町立朝日小学校
福島県須賀川市立白方小学校
法政大学附属第二中学校
工学院大学附属中学校
伊奈学園総合高校
法政大学
首都大学東京

国外の学校は以下の通りである。
カンボジア・メコン大学附属インターナショナルスクール(MIS)

カンボジア・チョムラウンポール小学校
カンボジア・メコン大学日本語ビジネス学科

中国・大連市立第十六中等学校
中国・大連外国語大学日本語学部
ネパール・チャンディカデビ小学校
ネパール・レイクシティ大学
ベトナム・ホーチミン社会人文科学大学日本学部

これらの中には、デジタル・ストーリーテリング制作を行った実践とビデオレター制作を行った実践が含まれている。また、墨田区立梅若小学校と只見町立朝日小学校、須賀川市立白方小学校、法政大学附属第二中学校では法政大学生が、メコン大学附属インターナショナルスクールでは法政大学とメコン大学の学生が、大連私立第十六中等学校では大連外語大学生が授業支援を行った。本研究は、これらの実践に対して、児童生徒への事前事後のアンケート調査を行い、これらのもとに分析を行った。いずれも人数が少ないこと、地域的文化的格差が大きいことから、量的調査手法は用いず、質的調査の観点からの検討を行った。

4. 研究成果

(1)教育評価手法の開発

本研究実践データの収集・整理について、日本および海外の生徒たちに異文化理解やグループによる協働作業について、2度のアンケート調査(実践前・後)を行った。同時に日本と大連・カンボジアの児童生徒の映像制作、双方のビデオレターを閲覧しての児童生徒によるフィードバックなどを中心としたデータ分析・評価も行った。国際交流型メディア・リテラシー教育のループリックを試作し、これを用いたデジタル・ストーリーテリングやビデオレターの実践評価によって、児童生徒たちの異文化理解の促進や協働学習におけるスキルの向上は一定程度認められた。

しかしながら、映像作品やプレゼン等では、限られた短い期間でグループによる作品作りを行ったため、年度によって天候(雨などで外での撮影が出来ないなど)や生徒たちの学習スケジュールとの兼ね合い(例えば、プレゼンの次の授業で試験があるなど)によって作品の質に差が出ることもわかった。また、海外の教員や生徒たちへのインタビューについては、言葉の問題やタイトな日程の中でボランティアの通訳を介して行われたこともあり、ループリックの妥当性や有効性の検証にはもう少しデータを積み重ねる必要がある。

本研究は、分析方法の範囲も定性的テクス

ト分析（作品、アンケート調査など）、参与観察、インタビューなど、多様なデータを収集し分析するところに特色がある。また、本研究自体が現地の教員・生徒向けのワークショップを開催し、双方向的且つ継続的なプロジェクトとして位置づけており、今後の双方向的な異文化理解の促進が期待される。

(2) 学習支援システムの開発

カンボジア・メコン大学での教育実践研究を開始するにあたっては、当初、現地のネットワーク環境や電力事情、技術スタッフ不在といった状況を考慮し、主に Facebook グループを使って進めて国際交流を開始し、その後、カンボジア・メコン大学のサーバールームに Mahara による国際交流用 SNS システムを構築完了した。これより、これまで制作を行ったビデオレターやデジタル・ストーリーテリング等の動画作品をショーケース・ポートフォリオとして参加者が公開できる環境を整備した。

また、Mahara にはプラグインによりループリック機能を追加することが可能であり、本研究にて開発したループリック評価基準を実装している。これにより、システムによる本教育実践での学修到達度評価手法を実現した。本研究において構築した Mahara による国際交流用 SNS システムは、前研究による成果であるグローバル・メディア・リテラシー(GML)教育理論の「5C3C 理論」を実践するためのプラットフォームとして機能しており、ループリック評価基準を取り入れることで教育・学習効果の評価・分析に有効であることがシステム検証段階にて示唆された。しかしながら、システムやループリック評価基準の有効性を検証するには、取り組んだ教育実践がまだまだ乏しく、今後、より実践を重ねたうえでの検証が必要である。

また、本研究を通じて、カンボジア・メコン大学の学長や IT 担当者らとは、教育実践内容を説明し、正式に協力と理解を得ることができており、最終年度には、その証として感謝状を授与された。同大学とは、今後、様々な共同研究への発展が期待できる。

(3) タブレット型端末の活用

本研究で行った教育実践の中で、江戸川区立鹿骨東小学校とカンボジア MIS のビデオレターによる異文化間交流については『メディア情報教育学 異文化対話のリテラシー』（2014年）にまとめ、GML 教育の基本原理と実践成果を明らかにしている。また、同実践については、坂本および村上の共著英語論文として「The “ Culture Quest ” Project-Media and Information Literacy Cross Cultural Understanding」（2013）を発表している。

いずれの実践もタブレット端末を用いて、

映像を制作しているが、タブレット端末利用以前は、児童生徒は撮影だけで、編集は学習支援を行う大学生が行っていた。タブレット端末は児童生徒自身が映像の編集を可能にした点で、画期的であるといえる。映像制作には、テーマの決定、絵コンテによる構成、撮影、編集、上映と振り返りの5つの段階を経る必要があるが、タブレット端末は小学校段階に導入することが可能であることを明らかにした。

また、GML 教育研究の視点からこれらの研究を通して明らかになったことは、児童生徒は互いの違いを見つけようとするのではなく、文化の同質性を発見しようとすることで、相互理解に至っているということである。

中等学校段階では、中国の大連市立第十六中等学校と法政第二中学校のビデオレター交流実践を論文にまとめている。評価については(2)で述べるが、GML 教育としては、全米メディア・リテラシー学会(NAMLE)でも報告を行い、英語論文「Intercultural Dialogue and the Practice of Making Video Letters between Japanese and Chinese Schools」として公表している。この論文は本実践をユネスコの「メディア情報リテラシーと異文化間対話」の理論との関連性を検討したものである。

さらに、須賀川市立白方小学校とネパールのチャンディカデビ小学校とのビデオレター交流の実践はユネスコのメディア情報リテラシーと ESD（持続可能な開発のための教育）の融合を実践的理論的に検討を行った。その結果、GML としての MIL を ESD に導入することにより、ESD の目標である能力の向上が認められた。この研究成果は、日本語論文「持続可能な開発のための教育へのメディア情報リテラシー教育導入をめぐる理論的および実践的課題の検討」（2016）および英語論文「Theoretical and practical issues on the inclusion of the Media and Information Literacy program with the Education for Sustainable Development program」（2016、掲載予定）として公表している。また、この実践の概要については『福島とネパールの子どもたち ビデオレターがつかないだであいのキセキ』（2016）として、オンラインで公開している。

一方、タブレット端末をデジタル・ストーリーテリング制作に用いることで、キャリア教育との接合を行った。「初年次におけるデジタル・ストーリーテリングを用いたキャリア教育実践」（2015）はそのような観点から執筆したものであり、メコン大学や首都大学東京でも同様の実践を行っている。

本研究を開始した時点では、タブレット端末の有効性を検討することが目的であったが、スマートフォンの普及が進むとともに、すでに高等教育段階ではスマートフォンの活用が一般的になっており、今後はタブレット端末だけではなく、スマートフォンも研究

対象にいて研究を進めることが必要である。

スマートフォンに対して、多くの学校では使用の禁止や制限をする傾向が強いが、これに対して次のように述べた。「ソーシャル・メディア社会における子ども・青年が抱える困難や危険性、そしてそこから生まれるパルネラピリティに対して、その困難・危険を避けるための指導をするだけでは不十分である。学校は、決して防護壁に固まれたシェルターではなく、しばしば子ども・青年が不登校や自殺を選ぶほか選択肢がないほどの暴力的な装置になることもある。この現状に対してソーシャル・メディアは、危険性を持ちながらも同時に子ども・青年自身が新たなコミュニティをつくり出し、アイデンティを獲得し、市民社会へ参加する場となる可能性をもっている存在ともなりうる」1)。ユネスコはメディア情報リテラシー教育に対して、保護主義よりもむしろエンパワーメントを基礎においている。今後の研究は、このような世界的な理論潮流を踏まえて進めていくことが必要である。

<引用文献>

1 坂本 旬「ソーシャル・メディアと子ども・社会」、『子ども学』、第4号、2016、p.165

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)

坂本 旬、「ソーシャル・メディアと子ども・社会」、『子ども学』、査読有、第4号、2016.5.26、pp.153-167

坂本 旬、「持続可能な開発のための教育へのメディア情報リテラシー教育導入をめぐる理論的および実践的課題の検討」、『キャリアデザイン学部紀要』、査読無、第13号(2016)、pp.171-196

村上郷子、「協働学習とリーダーシップの評価 - 司書資格課程の大学生によるアンケート調査を手がかりに - 」、『法政大学資格課程年報』、査読無、第5号、2016、pp.5-14

坂本 旬、「ユネスコ・メディア情報リテラシー教育 日本における政策と実践の可能性」、『日本教育メディア学会研究委員会、日本教育メディア学会研究会論集』、査読無、第39号、2015、pp.15-20

坂本 旬、「タブレット端末を活用した日中学校間映像交流の実践」坂本 旬、法政大学キャリアデザイン学部、キャリアデザイン学部紀要、査読無、第12号、2015、pp.93-116

坂本 旬、「初年次におけるデジタル・ストーリーテリングを用いたキャリア教育実践」、『法政大学キャリアデザイン学会紀要(生涯学習とキャリアデザイン)』、査読無、12巻2、2015、pp.3-11

坂本 旬、「情報化がもたらす教育の未来と

現実 - メディア情報リテラシー教育がめざすもの - 』、『教育』、査読無、No.826(2014.11)かもがわ出版、pp.68-76

坂本 旬、「異文化間コミュニケーションを中心としたメディア情報リテラシー教育の創造」、『法政大学キャリアデザイン学部、法政大学キャリアデザイン学部紀要』、査読無、第10号、2013、pp.157-175

村上郷子、「東京23区中央図書館の外部評価: 大学生による現地調査をてがかりに」、『埼玉学園大学紀要。人間学部篇』、査読無、第13号、2013、pp.219-230、http://www.media.saigaku.ac.jp/bulletin/pdf/vol13/human/18_murakami.pdf

村上郷子、坂本 旬、「インタビュー メディア・リテラシー教育の挑戦(その3) プロジェクト・ルック・シャープ代表シンディ・シャイベ氏に聞く」、『埼玉学園大学紀要、人間学部篇』、査読無、第13号、2013、285-291、http://www.media.saigaku.ac.jp/bulletin/pdf/vol13/human/29_murakami.pdf

和田正人、森本洋介、村上郷子他3名(3番目)、「ユネスコ『教師のためのメディア情報リテラシー教育カリキュラム』ガイド」、『東京学芸大学紀要、総合教育科学系(ISSN:18804306)』、査読無、Vol.64 no.2、2013、pp.299-325、http://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/132675/1/18804306_64_57.pdf

[学会発表](計10件)

Murakami, Kyoko, A Pilot Study of Collaborative learning and Inter/Cross-cultural understanding for Media and Information Literacy: Evaluation of Processes of Exchanging Digital Storytelling using Tablet Computers between Japanese and Chinese Junior High School Students, 13th International Conference for Media in Education: Smart Learning in Digital Environment (ICoME2015), August 18, 2015, Changchun, China: Northeast Normal University

Sakamoto, Jun, Intercultural Dialogue by video letter and digital storytelling between China and Japan, National Association for Media Literacy Education (NAMLE), June 27, 2015, Philadelphia: U.S.A.

Murakami, Kyoko, Struggling with Culturally Embedded Obstacles to Media and Information Literacy: The Global Alliance for Partnerships on Media and Information Literacy (GAPMIL) Action Plan for Asia-Pacific Chapter, National Association for Media Literacy Education (NAMLE), June 26, 2015, Philadelphia, U.S.A.

Murakami, Kyoko, How do university

students consider privacy issues: A case study in Japan, National Association for Media Literacy Education (NAMLE), June 27, 2015, Philadelphia, U.S.A.

Murakami, Kyoko, Proposed GAPMIL Action Plan for Asia-Pacific Chapter: Goals and Actions, Media and Information Literacy and Intercultural Dialogue (UNESCO-UNAOC), 28 September, 2014, Beijing, China: Tsinghua International Center for Communication

Murakami, Kyoko, Launching the GAPMIL Action Plan for Asia-Pacific Chapter (DRAFT), The Global Media Forum: The Role of Media in Realizing the Future We Want For All, Bali: Bali Nusa Dua Convention Center (BNDDC), 25-28 August 2014

Murakami, Kyoko, MIL, Intercultural Dialogue, & Rubric: how to evaluate the collaborative activities, Media and Information Literacy and Intercultural Dialogue (UNESCO-UNAOC), 24-26 April, 2013, Cairo University, Egypt

[図書] (計 7 件)

Sakamoto, Jun, The International Clearinghouse on Children, Youth and Media, Nordicom, University of Gothenburg. Theoretical and practical issues on the inclusion of the Media and Information Literacy program with the Education for Sustainable Development program MILID Yearbook 2016, 2016 (未発行のため総ページ数未定)

Sakamoto, Jun, The International Clearinghouse on Children, Youth and Media, Nordicom, University of Gothenburg. Intercultural Dialogue and the Practice of Making Video Letters between Japanese and Chinese Schools, MILID Yearbook 2015, ISBN 978-91-87957-13-0 (printed version), ISBN 978-91-87957-17-8 (pdf version), pp.239-245

Murakami, Kyoko, The International Clearinghouse on Children, Youth and Media, Nordicom, University of Gothenburg. Information Freedom and GAPMIL in Asia-Pacific Region: Challenges and Suggested Action Plan, MILID Yearbook 2015: Media and Information Literacy for the Sustainable Development Goals, 2015, ISBN 978-91-87957-13-0 (printed version), ISBN 978-91-87957-17-8 (pdf version), pp.153-160

坂本 旬、法政大学出版局、『メディア情報教育学 異文化対話のリテラシー』、2014、pp.1-227

坂本 旬、「福島・ネパール ビデオレターの実践について」

『福島とネパールの子もたち ビデオレ

ターがつないだであいのキセキ』福島 ESD コンソーシアム・法政大学キャリアデザイン学部編、デジタル SKIP ステーション、2016、pp.45-57

http://cq.i.hosei.ac.jp/?action=common_download_main&upload_id=3155

Murakami, Kyoko, The International Clearinghouse on Children, Youth and Media, Nordicom, University of Gothenburg. A Brief Mapping of Media and Information Literacy Education in Japan, MILID Yearbook 2014: Global Citizenship in a Digital World, 2014, ISBN 978-91-86523-97-8, pp. 271-288.

Sakamoto, Jun & Murakami, Kyoko, The International Clearinghouse on Children, Youth and Media, Nordicom, University of Gothenburg. The " Culture Quest " Project-Media and Information Literacy Cross Cultural Understanding, MILID Yearbook 2013: Media and Information Literacy and Intercultural Dialogue, 2013, ISBN 978-91-86523-64-0, pp.387-398

[その他]

ホームページ等

ユネスコ GAPMIL アジア太平洋・福島 ESD コンソーシム

<http://www.unesco.org/new/en/communication-and-information/media-development/media-literacy/global-alliance-for-partnerships-on-media-and-information-literacy/about-gapmil/gapmil-aisa-pacific-regional-chapter/>

法政大学キャリアデザイン学部福島 ESD コンソーシアム

<http://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/society/index.html#ESD>

異文化交流プロジェクト Culture Quest Japan

<http://cq.i.hosei.ac.jp/>

6 . 研究組織

(1) 坂本 旬 (SAKAMOTO, Jun)
法政大学・キャリアデザイン学部・教授
研究者番号：60287836

(2) 宮崎 誠 (MIYAZAKI, Makoto)
畿央大学・教育学部・特任助教
研究者番号：60613065

(3) 村上 郷子 (MURAKAMI, Kyoko)
法政大学・キャリアデザイン学部・兼任講師
研究者番号：80383131